

Title	AFL組合主義への挑戦：1900-1914年における対立と斗争
Sub Title	Challenge to pure and simple unionism : socialists and IWW movement, 1900-1914
Author	川田, 寿
Publisher	慶應義塾経済学会
Publication year	1969
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.62, No.2 (1969. 2) ,p.137(29)- 153(45)
JaLC DOI	10.14991/001.19690201-0029
Abstract	
Notes	論説
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19690201-0029

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

berg, Handbuch der politischen Oekonomie. Band III. Adolph Wagner, Die Ordnung der Finanzwissenschaft und der öffentliche Kredit. (4 Auflage, 1897) に示されている。

17 あとがき

現代の財政学において、アドルフ・ワグナーの学説は必ずしも理解されているとは云えない点がある。或いはむしろワグナーの学説から目をそらしている場合すらあるように思う。

現代の財政学者のうちでも、ドイツ系の学者を除いては、例えばイギリスの代表的な財政学書のひとつとして、U. K. ヒックスの「財政学」においては、ワグナーの財政学説の強い影響を受けているバステブル (Bastable) の解釈は参考しているが、何故かワグナーの解釈は全く無視している。現代の英・米の財政学書においてワグナーの財政学に理解を示しているのは、マスグレーブの「財政理論」(1959, 木下和夫監訳) と、ピーコックとワイズマン (Peacock and Wiseman) 共著の「The Growth of Public Expenditure in the United Kingdom, (1961)」などである。現代のわが国の財政学者においても、ワグナーがいう「経費膨張の法則」なるものは、法則というに値しないと判断している人々が多い。

しかし私は、近代資本主義の発展段階としての帝国主義へ移行している段階→帝国主義の第1段階において発現している政治経済的現象に関する必然的な因果関係を示している因果法則であり、また資本主義の発展における必然的な発展傾向を示している傾向法則でもあるという意味において、「法則」と云うに値すると解釈している(本誌11頁参照)。資本主義諸強国がその政治経済的発展の必然的な結果として帝国主義の段階に移行し、その拡大発展を続けた帝国主義段階の第1期は、ヨーロッパ資本主義について云えば第1次世界大戦までである(1920年代には既に拡大発展の段階を終わって停滞の段階に入っている。しかし、アメリカ資本主義を含めた世界資本主義としてみれば、1930年の世界経済恐慌までを、その第1期と云えよう)。財政現象が歴史的現象であることを考えれば、現代財政の社会経済的機能とその歴史的な性格を理解するためにも、その先行段階(帝国主義の第1段階)における代表的学説として、ワグナーの財政学説を理解することは重要な意味を持つであろう。(本稿でマスグレーブのほか外国の学者の解釈およびわが国の諸学者の解釈を検討する予定であったが、既に所定の紙数の枠を余りに超えたので、次の機会に譲ることとする。)

AFL 組合主義への挑戦

—1900～1914年における対立と斗争—

川 田 寿

はじめに

すでにみた独占形成期における、AFLの純粋組合主義または business unionism の定着化は、アメリカ資本主義が発展の基盤を強化する過程において、当時として体制が許容しうる労働者の組織と機能の限界を示したものとみられる。また、このような形に労働組合の方向を安定化させえたことは、アメリカ的労使関係の初期の特質でもある。

しかし、その反面、急速な資本主義の発展とその社会的影響は、他のアメリカ社会の特質である人民民主主義の展開と、広汎な急進的労働運動の抬頭展開をともなった。この急進主義のはげしい斗争は、その後アメリカにおける極端な反左翼思想を固定化させ、労使関係においても左翼排撃のために、あらゆる手段を展開させることになる。

また、この時期の反体制思想と運動は、アメリカにおけるこの種の運動の多様な類型を明示している点で、特に注目するものがある。さらに、諸民族の“るつぼ”といわれるアメリカ社会特有のダイナミックな性格と資本の強暴ともみられる積極性をも露呈している。

1 節 社会主義と労働組合

AFL と社会主義者 すでにみたように純粋組合主義者たちは、使用者の反撃をうけながらも、その承認をうるために努力し、労働協約の基礎の上に、或る程度の発展を続けた。この組合主義は、アメリカ的な生産者意識とはちがった二つの点で、社会主義の影響をうけていた。第1は賃労働者のみの階級的排他的組織を固守することであり、第2は経済問題を重視し、決してこれから逸脱しない点であった。この二点を労働組合の基本路線として固執したため、AFLは保守的となり、労働者階級本来の戦闘性を抑制し、排除することになり、資本主義構造変化に対応して労働者の利益を守る使命を放棄し、ひたすらこれに順応することになったのである。

この点に関して、マルクス主義の正統派はゴムパース等のいわゆる応用社会主義が全く社会主義を歪めたものであり、労働者階級の本来の目的を否定し、階級斗争に対する甚だしい裏切りである、⁽¹⁾とした。また、ゴムパース等は労働の似而非指導者であるから排除されなければならない、と考えた。さらに、労働運動は労働協約や単なる職業支配の団体に止まるべきではなく、労働者階級が中心となって雇用関係による搾取制度を廃絶する社会建設のための運動でなければならない、と考えた。

社会主義者は AFL 加盟組合の中に多かったが、純潔な理論と行動を守ろうとするものは、AFL 内部の緩慢な反対派活動に満足できなかった。彼等はいずれも狭い組合主義には反対であったが、政治問題についても労働組合政策についても、多くの分派に分かれていた。社会主義者間の内部対立は、従前からのもので、しばしば党組織の分裂に発展したものであった。その対立は、大別すれば、(1)日常要求の実現、公有、改良を可能とする“可能派”または日和見派、(2)資本主義の下では日常要求の実現さえ不可能であるとして、資本主義打倒の革命綱領のみを固執する“不可能派”、(3)社会主義者ではないが社会主義政党を反抗の党として支持する急進主義者または改良主義者、の三グループとなる。さらにブライアン人民党の相当数の支持者が、ブライアンの民主党合流後に、⁽²⁾社会主義政党を支持した。

第1分派の中心はヒルクイットであり、彼は労働組合内活動を重視し、1900年、独善的革命理論を抽象的に論ずるドレオン支配の社会労働党より離脱した。⁽³⁾彼のほかに、中西部の社会民主党のデブスやパーガーがあり、前者は急進主義から社会主義へ転じたもので、後者は日常要求斗争を重視して人民運動にも協力した。⁽⁴⁾第2の“不可能派”はドレオンが中心であり、従前余りに党組織を集権的に支配し、非現実的理論を強調したために、党员の間ことに労働組合内党员の間で嫌悪された。彼の理論には、労働組合を分裂させ、組織を大衆より孤立させるものがあった。⁽⁵⁾

社会主義者の内部対立にもかかわらず、彼等の上述した一般論のほかに、次の諸点で AFL の組合主義と鋭く対立していた。第1に、AFL 主流が政治的中立主義をとって労働者階級独自の政治活動を拒否し、資本家階級の二大政党に労働者階級を結びつけ、労働者階級の政治的利益に損害を与えた。第2に、未熟練労働者ことにニグロ労働者の組織を妨げるために、高額な組合加入費、組合員を白人男子に制限する規約、徒弟規程、基幹産業の組織放棄等の政策をとり、その結果、組合

注(1) 後年から見れば当時のマルクス主義はむしろ修正主義に属した。彼等に共通した最大の弱点は、資本主義の発展を具体的に理解できなかったため、帝国主義段階への移行の本質を把握することも、その矛盾の契機をも見出しえなかった。その典型的な代表者がドレオンであった。Foster, W. Z., History of the Communist Party, p. 96.

(2) Perlman and Taft, History of Labor in the United States, Vol. IV, p. 282.

(3) Foster, W. Z., op. cit., p. 94. ヒルクイットはロシア系ユダヤ人弁護士、社会党保守派の中心人物。

(4) Perlman は Berger の柔軟性ある幅広い理論を評して、ベルンシュタインの先駆者といっている。Perlman and Taft, op. cit., pp. 225-226.

(5) ドレオンについては、拙著「アメリカ労働運動史」上巻 pp. 335-337. を参照。

に加入できない差別された労働者大衆を使用者の搾取するままに放置した。第3に、階級協調主義を掲げて、全国公民連盟を積極的に支持したが、この団体は使用者攻勢の別動隊であり、その協調精神のために巨大資本へ労働運動が隷属することを余儀なくさせた。第4に、近代産業に対抗できる産業別組合を否定し、時代おくれの職能組合主義を固執したため、大企業の少数熟練労働者さえも分割して、労働者の統一斗争を困難ならしめた。これらの批判は 1900 年前後の組合勢力増大の機運に乗じて、労働組合が大幅に進出できる絶好の機会を逸した、という労働者間の強い感情に影響を与えた。

社会主義政党の統一と労働組合政策 以上の情勢を反映して、社会労働党の孤立的政策に反抗しはじめた社会主義者は、さきの“可能派”を中心として、全国に分散していた勢力の統合をはかった。1900年には合同大会が招集されたが、合同にまでは発展しなかった。しかし、その直後、大統領選挙に統一候補をおすことになり、二つの社会党から共同の候補をたて統一斗争がすすめられた。この選挙では、従来のドレオンを排してデブスを立て、社会党の得票は3倍も増した。この統一斗争は、両組織の統合を促進し、1901年大会において合同となり、アメリカ社会党がうまれた。この大会の決定は労働組合との関係について“可能派”の主張を明白に支持していた。その政治綱領は次のようであった。公益事業・独占企業の公有、公有企業収益は賃上げ、労働時間短縮、消費者価格引下げに当てる。労働時間短縮と賃金増額。傷害、失業、健康、養老に対する国家の管理する資本家負担の保険制度の創設。公共事業は財政負担によって運営し、その全収益を労働者に支払う。公共負担による全人民の教育。男女平等の市民権。人民の立法提案権と批准権。比例代表選挙制と代議員の召還制度等であった。⁽⁶⁾

さらに労働組合との関係については、社会労働党の抽象理論偏重を排して、労働組合は歴史的に必要不可欠な組織である、と認めた。組合員が社会主義者になっても、AFL を脱退する必要もなく、同時に二重の加盟を認めることとした。このために、この大会後 AFL 組合内の反対派活動あるいは“内部から掘り崩す”戦術の基調が確立された。

アメリカ社会党の組合活動 ドレオン派のセクト主義を排除した社会党は、その後党内左派をつくった労働者党员の増加によって、労働組合の斗争に活潑に参加した。彼等はストライキに、未組織労働者の組織に活動したので、多数の組合支部、市労働組合評議会、全国組合に対する影響を強めた。その結果、社会主義者の組合政策が AFL 大会に提出されるようになった。1902年には、賃金制度を廃止し、労働全収益の労働者取得を保証するような政治・経済上の権力を組織する決議案が提出され、僅少の差で敗れた。⁽⁷⁾この案を支持した組合は、坑夫、大工、醸造労働者等であった。1903年にも同様な案と産業別組合に関する決議案を提出したが、この度は大敗を喫した。

注(6) Strike, E. E., Contemporary Economic System, p. 208.

(7) Lorwin, American Federation of Labor, p. 74.

ゴムパース等は職能組合の近代化についての社会主義者の提案には全力をかたむけて反対した。彼は社会主義は経済的には不健全であり、社会的には誤りであり、産業的には不可能事である、と論難した。⁽⁸⁾ 1890年代のドレオンとの対立にはじまったゴムパースと社会主義者との対立抗争は第一次世界大戦終結時まで続いた。しかし、この対立は多くの社会党員によって、政党の支持を減らす結果をもたらすから、不毛であるだけでなく、不利益と考えられた。この考えに立ったヒルクイット派は、むしろ対立の外にあって中立を保った。これに反して左派は、ゴムパース等の態度は帝国主義段階の資本主義に協調する労働貴族の官僚であると断じた。⁽⁹⁾ 左派は労働者の権利を守って労働組合を強化し、社会主義を目ざす階級意識を高揚させるためには、ゴムパースの AFL 支配を覆えす必要があるとして、内部の反対派活動をおしすすめたのであった。

左派による労働組合内活動とともに、社会党が拡大するにつれて、社会党の構成に変化がおこっていった。多数の中間層に属する改良主義者が増加し、大多数が外国生れの移民で構成された左派は党内の少数派として孤立化していった。その上、ドレオン主義に対する反動として極端な組織上の分権主義がとられ、社会主義理論が充分理解されずに日常斗争にのみ専念したため、大衆的労働者党の成立を困難ならせた結果となった。さらに、一応ドレオンのセクト主義を排除したが、伝統的な AFL に対抗する労働組合を結成しようとする二重組合主義が党内に常に支配的であり、この傾向はとくに戦動的な左派に強かった。そのために、党政策が AFL 内活動を重視することを決定しても、行動的な左派は組合官僚との斗争を忍耐強く続けるかわりに独立組合を結成する方に関心をもつようになっていった。

アメリカ社会党の発展 党内に多数の分派とその対立を内包した社会党は、独占資本の急速な発展をめぐる国民大衆の動揺とマックレーキング⁽¹⁰⁾として知られる知識人の反独占出版活動等によって醸成された進歩主義運動等に影響されて、漸次発展の途をたどった。この発展にともなって、社会主義者大学協会、ランドスクール、青年社会主義連盟等を組織し、また国際婦人デーとなった婦人参政権示威行進を行なったりもした。1910 年前後には、国会議員をはじめ多くの地方都市首長や地方議会議員を選出した。これらの活動を反映して、1912 年は、13 の日刊新聞を含め 323 の定期刊行物を発行していた。⁽¹¹⁾

AFL 内の左派は、1907~13 年の恐慌期における資本攻勢に対抗して、多数のストライキ斗争に積極的に参加した。その代表的なものは、ニューヨーク女子裁縫工、ニューヨークとシカゴの衣服工、ハリマン鉄道労働者、西バージニア炭坑夫組織活動、カルメット銅山ストライキ、コロラド炭

注(8) Proceedings of 1903 AFL Convention

(9) Foster, W. Z., op. cit., p. 99

(10) Mackraking については, Regiers, C. C., The Era of the mackrakers や Steffens, L., The Autobiography of L. Steffens を参照。

(11) Foster, W. Z., op. cit., pp. 113-114.

坑ストライキ等であった。社会主義者によれば、この期間の AFL 発展は、社会党員や一般組合員の果敢な斗争と IWW の多くの大ストライキの影響によるところが大きい。

社会党員の斗争は、AFL 内の党の影響を高め、1912 年 AFL 大会において、党の支持した印刷工組合指導者ヘーズはゴムパースに対抗して会長の地位を争い、ゴムパースの約半数の支持票を集めた。ゴムパースに反対した組合は、醸造、帽子工、婦人服、製パン工、毛皮労働者、機械工、西部坑夫連盟等であった。そのほかにも、炭坑夫、窓ガラス工、印刷工、大工、石工、電気労働者、葉巻タバコ工等にも有力な支持者がいた。

当時の社会党の活動のうち最も重要なものに、外国生れ移民労働者を組織するために“言語別連盟”を組織したことがあげられる。党内右派は熟練労働者と中産階層に注目し、選挙権をもたない外国生れの未熟練労働者を無視した。この点、左派は外国生れ移民労働者の組織に努力し、北欧、東欧、南欧等各国労働者の言語別党組織をつくって、彼等の純労働者の要素を党に結集していった。⁽¹²⁾

アメリカ社会党の分裂 上述したように、アメリカ社会党の左右両派の立場と行動の相違はますます拡大していった。しかも戦動的な左派党員の多くは、AFL の保守性に反撥して IWW の運動に参加した。中央と地方を通じて左右両派の対立ははげしくなり、特に青年党員の多い左派は戦動的ではあったが、伝統的に健全な政策をもたず、しかもセクト的な傾向におちいる欠陥をもっていた。

分裂の発端は、ワシントン州の左右の対立からであった。ワシントン州の党が左右に分裂したとき、全国執行部は右派のみを支部として承認した結果、左派は党外に排除されることとなった。左派は地方的な労働党を結成したが、極端にセクト的であったために党の維持が困難になり、集団で IWW の地方運動に参加していった。⁽¹³⁾

左右両派の対立は拡大して、1912 年社会党大会において表面化した。この大会における対立は、サボタージュ戦術と産業別組合主義の可否をめぐるものであった。⁽¹⁴⁾ 当時左派は IWW の拡大、言語別連盟の活動、AFL 内活動等を通じて、右派の党指導権をおびやかす勢いとなりはじめていた。左派は、またフランス、イタリアのサンジカリズムの例にならって、労働者階級の有力な斗争手段としてサボタージュ戦術を重視していた。これに対し、右派は党規約の修正によって、“政治行動に反対し、または犯罪、サボタージュその他暴力にたよる方法を労働者階級解放の手段として支持するのは、党より除名される”ことを明記した。マルクス主義の支持しないサンジカリストの戦術であったサボタージュ問題について左派は、階級的戦斗精神を圧殺しようとする右派のかくされた意図に対抗して、サボタージュ支持の態度をとった。社会主義の立場から左派には矛盾があったため、大会

注(12) Fine, Labor and Farmer Parties in the United States, p. 325.

(13) Foster, W. Z., op. cit., pp. 121-122.

(14) Sabotage の語はアメリカ急進労働運動では長期にわたる直接行動と併用された。Brissenden, IWW, p. 53.

では右派が圧倒的多数に支持された。産業別組合でも右派の中立をまもる案が支持されることとなった。

その後、右派はヘーウッドが暴力行使を支持して修正党規約に違反したという理由から、彼の除名を強行して、左派に挑戦した。ヘーウッドの除名は全党員投票によって承認された。これを契機として、左派の戦斗的党員は党に見切りをつけ、続々脱党し、社会党組織のいちじるしい後退をもたらした。この分裂の後、AFL 内ではゴムパースに対立する会長候補はなくなり、産業別組合主義の提案も多年にわたって姿を消した。これは社会党右派と AFL 指導者の提携が成立したからであった、とみられる。また社会党は分裂以来、それ以前の最高潮期の勢力を一度も回復できないという沈滞におちいってしまった。

2 節 急進的組合運動と IWW 結成

西部の労働運動 19世紀末から20世紀初頭にかけて、アメリカ西部は革命的産業別組合主義が発展するための絶好の基盤を提供していた。労働争議ははげしく、長くつづき、そしてしばしば労使間の斗争というよりも内乱のような性質を帯びていた。西部諸州には労使の対立を緩和するといわれる有力な中間階層がなかった。そこでは労働者は東部の金融資本が労働貴族に課したような役割は演じられなかった。そして東部にくらべてはるかに苛酷な資本主義の支配が労働者の直面した現実であった。労働者の斗争に反対する使用者の手段は原始的であり、使用者の個人的特権は頑強に維持されていた。この環境のなかで、労働者階級はしばしば使用者の圧迫下の緩慢な運動に忍耐しつづけることができなくなった。その結果しばしば暴力的斗争がおこり、財産権は侵害されるようになり、階級協調を基調とする労働協約は嘲笑されるようにさへなっていた。⁽¹⁵⁾

ロッキー山脈地帯の鉱山には、戦斗的で自己犠牲的な、しかも富はいつでも運がよければ手に入るものと考え、したがって財産権をなんとも考えないような労働者が多かった。北西部の木材キャンプ、カルフォルニアのホップ耕地、ロッキー両側の果実・小麦地帯には、また太平洋岸の海運産業など、その他西部のどこにでも多数の移動労働者が浮動していた。これら労働者には長期継続の雇用による生活上の安定がなく、財産所有や家庭生活、社会的地位などによる安定もなかった。それ故、現在の社会秩序の確立などは問題ではなく、いつでも資本主義制度を打倒するためにたちあがる用意ができていたのである。このような労働者の諸条件は、アナクロ・サンデカリズムの絶好な基盤であった。

注(15) Haywood, William, (1869—1928) はサルトレーキ市生れ、少年時代より鉱山労働者として戦斗的であった。西部鉱夫連盟の書記長となり、1907年に刑事事件に問われ、以後左派指導者として、労働者組織に天分を発揮した。IWWの中心的指導者でもあった。

(16) Perman and Taft, op. cit., p. 169.

これら労働者は社会主義には直ちに結びつくことは困難で、社会主義を認めるためには、その経験を反復して説明される必要があった。それ故西部労働者の中には社会主義者は少かった。また AFL の職能組合は、このような労働者を受け入れる組織ではなかった。その上 AFL の局限された目的は、西部労働者のように前期的な苛酷な労働条件のもとに苦斗するものにとっては、全く魅力のないものであった。彼等は西部資本主義によって団結行動を頑強に禁圧されており、資本主義の兇暴性をもよく知らされていたので、彼等の組織活動には彼等の当面していた諸条件に応ずるような強靱さを必要としていた。この点、資本主義制度に強く反対する社会主義思想を加味した労働者大衆の動的な強烈な戦斗性を完全に発散できる労働組合——IWW が最も適していたのである。

西部鉱夫連盟 西部労働者の条件にもっとも適した組合は、西部鉱夫連盟であった。この組合は、労働者の解放は産業別に全労働者の団結をはかり、戦斗的戦術による急進的斗争によってもたらされる、という西部鉱夫の信念にもとづいて 1893 年に結成された。⁽¹⁷⁾その後、この組合はクリップル・クリーク、サルトレーキおよびクール・ダレーンの大争議を 1890 年内に指導し、続いてテルユライド、アイダホ・スプリング、クリップル・クリークの大争議を 1901—4 年間に指導した。鉱夫連盟の指導したストライキはつねに秩序を乱し、暴力を伴った。そしてその影響は当時の組合労働者の急進化を促進した。⁽¹⁸⁾

西部鉱夫連盟は鉱夫出身のヘーウッドに指導され、階級斗争によって生産者たる労働者階級は搾取される状態から解放されねばならない、そのための唯一の手段は産業別組合と全労働者の統一政治行動のみである、という規約前文を組織の信条としていた。⁽¹⁹⁾

この組合は、多くの斗争を通じて州政府や市当局が資本家と結託してストライキ弾圧に州民兵を動員し、また労働差止命令が濫用された事実を経験していたので、社会主義者との統一政治行動の必要を認めていた。同時に鉱夫以外の労働者との統一行動の必要を痛感していた。これらの観点から 1898 年には西部労働組合を結成してその中心的役割を演じ、同年社会民主党の結成にも中心となった。1902年西部労働組合はアメリカ労働組合と改名して、その本部をシカゴに移したが、1905年他の急進的組合と合流して IWW を結成した。このようにして西部労働者の急進性を代表した西部鉱夫連盟は、全アメリカに散在した急進組合を結集する中核となった。

西部鉱夫組合は 1893—97 年間 AFL に加盟し、その後 1911 年再び AFL に復帰するまで、AFL に対立する急進組合の中で指導的活動をつづけた。鉱夫連盟と西部労働組合とは AFL 政策を非難したが、その組合員の大多数は未熟練労働者であり、鉱夫のほかに料理人、給仕、仲仕、木材労働者が主となり、彼等は西部諸州の各地に分布されていた。西部労働組合は熟練の有無を問わずすべて

注(17) Ibid, p. 172.

(18) Brissenden, op. cit., p. 41.

(19) Proceedings Tenth Western Federation of Miners' Convention pp. 163—165. cit. by Brissenden, op. cit., p. 43.

の労働者を産業別に組織する方針をとった。後身アメリカ労働組合は全く前者の方針を受けついで、

社会主義者の反 AFL 活動 1901 年のアメリカ社会党の統一によって、それまでの指導的地位から追われたドレオンは、公式革命理論と反 AFL で一貫した斗争を続けていた。彼は 1895 年社会主義労働同盟を組織し、AFL に対抗する産業別組合を構想して、各産業分野に階級意識の高い労働者を組織することなしには、社会主義は単なる精神的存在に止まるといった⁽²⁰⁾。労働同盟は社会労働党の公認団体となり、同党の指導下におかれ、党目的達成の部隊として全労働者階級の統一を実現するものとされた⁽²¹⁾。そして労働同盟が資本主義の影響をうけることを防止するために、その幹部は社会労働党以外の党を支持しないことを誓約することとした。

労働同盟は組織上多くの点でナイツ・オブ・レーバーの型に従った。それ故にその組合は中央集権的な職能組合と混合組合とであった。その点労働同盟は革命的な労働組合というだけで産業別組織ではなかった。しかも労働者大衆が経済斗争に専念することをおそれて、強い政治的結合を要求し、結局左派社会労働党員の労働組合という性格をおびていた。その意図したところは、集中した大資本の攻撃は政治上の制度に支持されているのであるが、労働者階級の反撃は階級の統一した力で政治経済の両面からする直接行動以外に効力がない、という表現のうちにつくされている⁽²²⁾。以上に続いて労働同盟の規約は資本主義打倒と社会主義社会における労働者の地位について述べている。労働同盟は分裂後の社会労働党と同じように、その理論構成と主観的な抱負のみが大きく、実際の組織力は 20 数種にまたがる労働者約 3000 名にすぎなかった。この点、西部労働者大衆の特殊条件を基盤として結集され、産業別組合の斗争を実践してきた西部鉱夫連盟を主力とするアメリカ労働組合とは全くちがった単なる観念上の組織にすぎなかった。

IWW の結成 以上述べた二つの AFL 反対の運動および前節で述べた AFL 内部の社会党左派のほか、AFL 内の産業別組合や職能組合のうち組張り争いから AFL 幹部に対立していた一系の組合があった。これらの反 AFL 要素が中心となり、すでに急進的全国組合の結集に着手したアメリカ労働組合を中心とする大合同の気運が進められた。

1904 年社会主義および労働運動の指導者がシカゴ市に集まり非公式に、反 AFL 組織の結成を協議した⁽²³⁾。その中には醸造労働組合、鉄道友愛会系組合、アメリカ労働組合の代表、合同金属労働全国組合の代表としてデブス等のほかにドレオンやウンターマン等の知名社会主義者がいた。この会合での共通点として AFL が労働者の利益を守るには余りに弱体化していることが認められた。労働組合の無力化は AFL のみでなく急進的組合の場合でも同様で、使用者の強力な組織の前には

注(20) Katz, With DeLeon Since '80. Quoted by Brissenden, op. cit. p. 48.

(21) Brissenden, op. cit., p. 48.

(22) Constitution of the Socialist Trade and Labor Alliance of the United States and Canada (1992), pp. 3-4. Brissenden; op. cit. p. 50.

(23) Perlman and Taft, op. cit., p. 230.

すべての組合が対抗できない状態におこまれていた。この共通の問題が AFL の後退と官僚化の傾向の増大と関連して新労働運動の発足の契機となった。

この準備にもとづいて、1905 年「産業別組合会議」がシカゴで開かれた。この集会は秘密に行なわれ、9 団体から 23 名が参加した。集会後、宣言を公表したが、その内容は (1)労働組合の現状批判、(2)新団体の主要な主張と計画、(3)新組合組織大会への参加要請である⁽²⁴⁾。資本陣営の強化の前に職能組合が無力であること、そのみでなくこの労働者を分断する組織は各組合を相互に敵対反目させ、労働者を職業独占と政治的無知におとし入れ、階級意識を失わせるために搾取する使用者と雇われる奴隷との利害一致をとく、と非難した。これに対して新団体は、全産業を包含する産業別組合で、それは地域的職能自治、全国的産業別自治と一般に労働者階級の統一にもとづくものであり、階級斗争を基調とする経済上の団体としていかなる政党にも属さない、ものとしていた⁽²⁵⁾。

この会議は AFL 指導者を批判したが、その参加組合とは共同斗争による統一の可能性を考えていた。しかし最も重要な組織対象は未組織労働者であった⁽²⁶⁾。AFL 内部活動を重要視するか否かの論議はあったが、産業別主義者の大多数は未組織労働者大衆を大量に組織して、AFL を吸収しようと考えたのであった。

1905 年 7 月産業別会議または産業別組合会議⁽²⁷⁾とはじめ呼ばれた IWW の第 1 回大会が開かれた。この大会には広範囲の職業にわたる労働組合が参加した。主としてシカゴより西部の組合であったが、約 40 の参加団体のうち正式代表は 22 の異なった団体 (うち 5 団体は AFL 加入)、非公式代表は 12 団体 (うち 9 団体は AFL 加入)、ほかに 9 団体からの個人参加があった。参加団体のうち有力だったのは西部鉱夫組合であり、そのほかにはアメリカ労働組合参加組合のみで、AFL 系の組合は多くの地方組合に限られた。

この大会の代表は全体として大衆と結びつかない指導者が多かった。その空気は革命的社会主義でみたまされ、少数の無政府主義者も革命的産業別主義者として参加した。およそ議会主義者や協調主義者は参加の余地のない、賃金制度を全面的に否認する集団であった。このように多様な人たちの集会は少数の指導的人物によって方向づけられていった。その少数の指導者は、ドレオン、ヘーウッド、トラウマトマン、サイモン、ハガーティ、デブス等であった。

IWW と AFL IWW 第 1 回大会席上における AFL 非難の中心は職能組合主義であったが、労使協調と労働者階級の統一政治活動否認についても強烈な攻撃がおこなわれた。さらに AFL の

注(24) Brissenden, Ibid. pp. 62-63.

(25) 職能組合の自治が産業別組織原則とどう調和されるかについては矛盾があり、同時にこの点で AFL は社会主義者の対抗運動としての AFL 切崩し策とみた。また政党支持を拘束しない点では後の分裂をひきおこす原因となった。

(26) DeLeon-Harriman Debate. The S.T. and L.A. vs. Pure and Simple Trade Union, p. 43.

(27) Industrial Congress 又は Industrial Union Congress.

悪として、(1)60年以前のイギリスの状態にのみ対応する運動、(2)16の互いに争う組織上の分断、(3)人種と貧しさによって労働者を差別する、(4)組合員の民兵応募を認めてストライキ労働者を射殺することを承認する、(5)熟練労働者を労働貴族化させ未熟練労働者を放棄している、等をあげた。

第1回大会によって決定された IWW の組織は、決定機関としての大会、大会が選出する会長・会計書記・執行委員会の集権的執行機関、13の全国産業別組合(これは産業部と呼ばれる)、地方評議会と産業別支部であった。

準備大会と第1回大会を比較するとき、後者においてドレオン派が強力な発言をなした結果、政治的な統一行動および AFL 活動の排除の点で大きく変更された。そのために参加者のうちには不満を表明するものがあつた。ドレオンは従来のセクト的活動の経験から社会党員のデブス、サイモンは勿論その他の参加者からも警戒されたが、その理論に対抗できるものは少かつたので、大会における彼の発言は IWW 初期の性質を決定するに当って大きな影響力を示した。しかし実際に IWW を成立させ、その後推進した力は西部鉱夫組合であった。鉱夫組合の資金とその後の斗争がなかつたとしたら、IWW は全く存在するにいたらなかつたのである。

IWW の結成、ことにその際のドレオンの活動は強くゴムパースを刺激した。ゴムパースはシカゴ大会を、巨大な宣伝の後に社会主義労働同盟とアメリカ労働組合の一握り集団が世界の産業労働者と誇称する団体をつくり、多くの計画をたてているが、世界に未だ見られなかつた最も愚劣な不可能なことを考える集会となるのであろう、と罵倒した。⁽²⁸⁾

IWW 指導者はゴムパースその他外部からの非難や内部の不統一、期待よりはるかに少数(約5万)の加入組合員数にもかかわらず、将来の発展に大きな抱負をもっていた。

3 節 IWW 初期の活動と分裂

IWW の活動 IWW 発足当初の活動は一部の地域に限られ、しかもそれは既存の職能組合を産業別に編成するための宣伝煽動の活動であつた。都市労働者の多くは産業別組合の経験がなかつたので、この種の活動は結局組合内部の紛争を刺激し、分裂と対立をはげしくするにすぎなかつた。その結果 AFL 所属の機械工、大工、帽子工、皮革工等の組合より強烈な反対をうけ、それら組合は IWW に加入した労働者を組合の管轄する職場より追放することに決定した。

それにもかかわらず、シカゴ、ニュージャージー、オハイオ、ネバダ等のストライキを指導した。これらのストライキは中央からの援助をうることができなかつたので効果的なものではなかつた。ことにゴールドフィールドの鉱夫町のストライキには AFL がスト破り労働者を送り込み、長期にわたる全地域労働者の斗争となつた。その結果、西部鉱夫組合のほかに IWW の革命的行動

注(28) American Federationist, vol. XII pp. 514—516.

がさかんになり、暴力をもってスト破りを町から追放するなどはげしい行動に発展したのち、ついに全地域を完全に組織し、使用者をして労働時間短縮、賃上げ、組合員雇入れ等を承認させた。この IWW の勝利はひろく宣伝され、戦斗的組合の戦術は AFL のスト破りと協調主義によるよりも強力であると誇つた。この斗争は1906年より1907年4月まで続いた。⁽²⁹⁾

その後、この IWW 支配の地域の使用者も残存した AFL 組合も武装して業務に従事したといわれる。勝利した IWW と西部鉱夫組合は、労働協約を否認していつでも行動を開始しうる条件を保持した。西部鉱夫組合支部をつくつて、僅かの IWW の他の組合に属するもの以外は、事務員も給仕も全部その組合に加入させた。鉱夫組合は賃金の小切手支払を拒否して現金支給を要求し、1907年11月ストライキに入った。⁽³⁰⁾

ゴールドフィールドの勝利に勢いをえた IWW は、1907年恐慌突入にもかかわらず、各地にストライキをまきおこした。ストライキは東部の繊維、絹、ピアノ、鋼管産業労働者に、また中部・西部の鋼板、溶鉱、木材、製材、鉱山産業に拡大された。大会報告によれば、1万5千の労働者が24のストライキをおこし、大多数は2~6週間、その他9~10週間、最も長期のものは6ヵ月余にわたつた。そのうち二つは完全敗北、他は妥協か要求貫徹であつた。⁽³¹⁾

IWW のストライキは AFL の反対に直面し、破られることがあつた。しかし未組織分野ではこの種の抵抗はなかつた。オレゴン州ポートランド製材労働者の場合、少数の IWW 組合員がストライキ宣言をしたところ大多数労働者は直ちに行動をともし、組合に参加した。40日間の罷業中 IWW は就職斡旋部と食堂を設けて争議中の労働者をたすけた。このストライキには何等の暴力斗争もなく、組織者の献身的活動の下に強固な団結をたもつた。賃上げが承認されて解決した。この勝利は西北部において、IWW を大衆化する最初の契機をつくつた。⁽³²⁾

IWW は太平洋岸進出につれて、人種差別への反対を主張し、当時保守的労働組合が行なつていた日本人排斥運動をはげしく非難した。⁽³³⁾そして日本人労働者の組織を強調した結果、日本人が相当数 IWW に参加し、そのうちには指導的活動をしたものもあつた。⁽³⁴⁾排日運動抬頭期に IWW の人種差別反対は、日本人移民に好感をもたれ、シヤトル市の日本語新聞、北米タイムスは、アメリカにかつてなかつたすべての民族を組合員に加入させる組合を主張した IWW についての社説をかかげている。⁽³⁵⁾

注(29) Brissenden, op. cit., pp. 195—197.

(30) 60th Congress, Labor Troubles at Goldfield, Nevada, House Document No. 607, pp. 20—21.

(31) Brissenden, op. cit. p. 204.

(32) Ibid., pp. 205—206.

(33) Proceedings of the Third Convention, Official Report No. 7, p. 1. カルフォルニア代表 Speed, George の発言。Haywood も第1回大会において AFL のニグロその他の人種差別を強く非難した。

(34) これら日本人労働者は中国人と同時に、1900年前鉄道建設土工として渡つたもの、1900年前後からハワイ経由で太平洋岸に渡り、製材所、鉱山、農業、漁業等の労働者となつたものが多い。

(35) この新聞はシヤトルの日刊「北米時報」"The North American Times"であり Brissenden が英字紙 Weekly Times, June 2, 1906, p. 1. より引用している。Brissenden, op. cit., p. 209.

二、三の注目された斗争によって異彩をはなした IWW は、1907 年恐慌の渦の中にその存続の斗争が著しく困難となって、沈滞に当りた。その沈滞は当初からの内部対立をはげしくし、それはついに分裂にまで発展していった。

IWW の内紛と分裂 1907 年恐慌期の初め 18 ヶ月間 IWW の指導したストライキは皆無となり、活動は全く沈滞した。東部の繊維と西部の木材、農業、建設に最大の影響力をもつにいたったのであったが、活潑な動きはなくなっていた。そればかりか激しい斗争の中心であった諸地域の組織活動が最も沈滞し、IWW からはなれていった。1908 年には最強力の醸造労働組合は AFL に復帰し、IWW の発足以来の支柱となった西部鉱夫組合も脱退した。そのとき IWW に止まったヘーウッドは鉱夫組合から除名され、同組合の内紛をまきおこした。これは鉱夫争議への IWW の参加が必ずしも組合の利益とはならなかったばかりか、ゴールドフィールド争議のとき IWW 系の外部労働者のはげしい応援行動がかえって世論を反組合にかたむかせた結果、鉱夫組合指導部が保守的になり反 IWW になったためである。⁽³⁶⁾

すでにみたように、IWW は当初より左右両派社会党と西部の労働者による産業支配を信念とするサンヂカリストおよび少数の無政府主義者の結合であった。そのうち社会党内の右派は離脱し、その左派も消極的になり、結局は社会労働党のドレオンのセクト的純理論派と、無政府主義者と結びついた西部の行動主義者が残った。残存派閥は組織の指導権争奪に狂奔し、1908 年 9 月大会の席上多数を占めた直接行動派は IWW の執行部を独占した。この大会では規約前文の「労働者階級の政治的な統一」なる句を修正して、「世界の労働者が階級として組織し、土地と生産手段を所有し、賃金制度を廃絶するまで階級間の斗争は続けられねばならない」と変更し、いわゆる政治をしめだす決定をなした。

これに対してドレオン派は別の大会を開き多数派を理論のない無政府主義者の一団と非難し、本部をニューヨークにおき、間もなくデトロイトに移った。⁽³⁷⁾これに先立って多数派はセントジョン、トラウトマンを中心にシカゴ本部に止った。

両派は次の点で考え方が対立していた。第 1、組織の点でドレオンは地域産業別支部は生産品目によるが、この支部の下に職業や職場の分会を使用工具別におくことを主張した。ジョンによれば醸造工場の運送人夫もビール生産の労働力であるから、事務員などと共に同じ醸造組合に属すべきであった。第 2、ドレオンは直接行動とサボタージュを非難し、ジョンはこれを肯定した。ドレオンは道徳上からではなく、マルクス主義の立場から怠惰や破壊を慣習づける戦術は、将来産業の経営と管理に当ることを予定する労働者階級に対する教育方針として誤りであるとした。第 3、ジョン

注(36) Millis and Montgomery; Economics of Labor, Vol. III, p. 120.

(37) これは Detroit IWW とよばれ、1905 年その名称を Workers' International Industrial Union と変えたが、ST & LA と同様、セクト的な存在を続けた。

は無条件に政治行動を否認した。ドレオンは、政治は経済上の解放の一時的手段であって、終局的には政治的に抑圧する政府は廃止され文字通りの産業民主主義が定着すると主張した。⁽³⁸⁾

このようにして、西部労働者たちの革命的理論家の分析や綱領の表現力によって組織を発展させようとする活動は短期間にして崩壊した。彼等は直接行動によって資本主義の特権をできるだけ急速に奪取しようとあせった。そして理論をすてた独自の奔放な行動に走った。他方ドレオン一派は労働者大衆の動向を無視し、独善的な純粋革命理論の宣伝のみに専念して少数のセクト的存在であるに止った。そして理論の点で最後までドレオンを支持しようとした労働者大衆指導者、社会党左翼のデップスも彼を見捨てた。これより以前に急進的革新論を非難して IWW を去った社会主義者たちは AFL 組合内部でまたは独立組合の中で組織確立に努めた。たとえば炭坑夫組合や合同衣服組合は産業別組織の強化と拡大に努力して成果をあげたのである。

4 節 IWW の直接行動とその結果

IWW の直接行動 社会主義者を排除したのちの IWW の主要な戦術はゼネラル・ストライキ、サボタージュ、言論自由斗争にむけられた。ヘーウッドは西欧訪問ののち、フランス、イタリアの労働者の団結行動とアメリカ職能組合の分裂行動とを比較して、広汎な労働者の統一行動や共同斗争を強調し、ゼネラル・ストライキの必要を強調した。⁽³⁹⁾たしかに 1909 年スウェーデンのゼネスト以後、フランス、イギリス、イタリア等に拡がったゼネストの高潮は社会革命の前夜を想像させるに充分であった。所有者階級がその背後の社会機構を利用して行なう権力支配に対して労働者階級を解放するものは、全労働者の団結した直接行動による実力の行使以外にない、という考え方が IWW に移植された。また直接行動はほとんどサボタージュと理解されていた。それは終局的には職場から使用者を排除しようとするものであった。独占資本が法を無視し国家権力に保護されているとき、法の権威を尊重する必要がない、と彼等は主張した。⁽⁴⁰⁾ストライキ中スト破りの雇入れを阻止するためには、彼等の食料や原料の搬入と製品の搬出を完全に阻止しなければならない。そのためのピケットの効果をなくするために政府が権力をもって干渉するときは、これに抵抗して大衆的に留置所や刑務所に入っていく。この抵抗を拡大すれば国家機能も無力になると論じた。⁽⁴¹⁾

急進的社会主義者に反対した IWW は、はじめ西部の未熟練労働者と移動労働者の代表となり、建設、農業、木材、ホップ耕地、港湾等の労働者にストライキを誘発させ、彼等のストライキ気運

注(38) Perlman and Taft, op. cit. pp. 233-236.

(39) Haywood, W. A., The General Strike, p. 9.

(40) Trautman, W. E., Direct Action and Sabotage, p. 23.

(41) St. John, V., The IWW; Its History, Structure and Methods, p. 17 cit. by Brooks, J. G., American Syndicalism, p. 144.

に介入して、これを指導した。1909年頃から東部の未組織移民労働者の中から母国で労働運動を経験した有能な指導者を IWW に迎えた。移民労働者は一般社会は勿論 AFL から排除されていたため、IWW の方針はよるこぼれたのである。東部における、マッキース・ロックスやローレンスのストライキの勝利は、IWW に対する移民労働者間の声価を高めた。

同時に、当時 IWW の宣伝煽動は多く街頭演説にたよらねばならなかった関係上、そのご言論自由斗争が盛んに行なわれるようになった。⁽⁴²⁾この街頭宣伝は、使用者が私的利益のために官吏と結託している実情に対抗して、労働者の憲法上の権利を擁護する役割を果たしているような印象を与えた場合が多い。

IWW をしてサンデカリズムの方向に発展させた要因については多くの見解がある。これらを概括的にみれば、(1)IWW に組織された多数移民労働者は選挙権がなかった。(2)AFL や社会党右派が余りにも日和見的であった。(3)当時のアメリカ政治が腐敗の極に達していた。(4)無政府主義者が IWW 内の影響を強くしていった。(5)IWW に最大の影響を与えたドレオンは排除されたが、彼の一貫した政党と労働組合を一体化しようとした活動そのものにサンデカリズムに通ずるものがあった、等があげられる。

ストライキ斗争 IWW は前記のゴールドフィールド斗争のち沈滞したが、1909年より活潑になり 1912 年を頂点とする激烈な斗争を展開した。その主なるものは、マッキース・ロックス、ローレンス、アクロン、パターソン、ニューベッドフォード、シカゴ、リトル・フォールス、その他ルイジアナ、ミネソタ、カルフォルニア、ワシントン諸州の各地にわたっていた。産業的には金属、鉱山、木材、繊維、農業、建設等が中心であり、大部分は外国生れの労働者の斗争であった。ストライキ斗争は言論自由斗争に援護され、スポーケン、サン・ディエゴ、デンバー、カンサス・シティ、スークス・シティ、オマハ等で戦動的に敢行され、多数の戦斗分子が投獄された。このようにして IWW は、当時多くの労働者間では不屈の戦斗的労働者精神の象徴となった。

IWW の斗争の代表的なものとしてローレンス繊維労働者のストライキがあげられる。ストライキの直接原因は 1912 年 1 月婦人年少者労働時間制限州法の施行に伴って賃下げが行なわれたこと⁽⁴³⁾にあった。当時職能組合の 2,500 の組合員に対し、IWW 組合員数は、1,000 以下であった。しかしストライキがはじまり、ヘーウッド等の優れた大衆指導者が本部から応援したため、最初 14,000 名の罷業労働者は間もなく 25,000 名に増加した。⁽⁴⁴⁾ストライキが激化するにしたがって警官、民兵、治安官代理と争議労働者の間に暴力行使が一般化した。IWW 指導者は、団結、消極的抵抗、直接

注(42) IWW の最も活動期になったのは 1912 年であって、言論自由斗争の大キャンペーンも 1911 年以後数年間に最も多かった。Brissendon, p. 283.

(43) Hearing on the Lawrence Strike, House Committee on Rules, 72nd Congress, p. 75.

(44) マス・ビケットが工場に乱入して就業中の労働者に呼びかけストライキに参加させたためだといわれる。Perlman and Taft, op. cit., p. 267

行動、サボタージュ等を勝利への手段として説いた。新聞の報道は騒擾を誇張して伝え、IWW の「おそるべき破壊行動力」が一般に恐怖の念をいだかせた。⁽⁴⁵⁾この種の一般的感情にもかかわらず、実際にはスト破りに対する夜間自宅訪問や威圧行為が繰り返されたにすぎず、それ以上の行動としては盛んな示威行進や街頭演説等が行なわれたのみであった。警察が干渉しても次々とおしよせる IWW の闘士のために、彼等の行動を阻止することは困難であった。

AFL や社会党は争議の早期解決を希望して、彼等の組合員やその影響下の労働者をストライキ中にもかかわらず就業させるように努めた。しかし末端労働者は指導者の希望とは反対に争議を応援し、AFL と社会党に属する労働者の応援資金は全国より送られた資金の大部分を占めたほどであった。労働者大衆の同情にまもられた強固な統一行動は遂に要求の大半を獲得した勝利にみちびいた。賃金は 15~20% 引上げ、時間外労働割増引上げ、試用期間短縮等が認められた上、ニューイングランド繊維工場全般にわたり約 25 万の労働者の賃金引上げという副次的成果をさえあげたのであった。⁽⁴⁶⁾

この IWW のゼネストの成果は、ヘーウッド達によって宣伝され、ストライキ労働者に対する関連産業労働者の支持が約束され、その結果ストライキの勝利は確定的なものになる、と説かれた。そして「労働者の被害は全労働者に共通する被害である」とする団結心高揚のためのスローガンは、広汎な労働者の間に異常な好感をもって受け入れられた。

この争議は広汎な組織労働者とインテリゲンチヤの IWW に対する関心を高めた。また、国家によって最も保護された羊毛繊維産業の賃金が余りにも劣悪であったという事実および国家と結託する独占資本の巨大な不当利得に対する警戒心を高めた。さらに未熟練労働者と熟練労働者、男子と女子の労働者が、革命的指導者に激励された見事な統一行動によって勝利した事実は、AFL 幹部をさえ従来の政策を変更するよう余儀なくさせた。⁽⁴⁷⁾多くの青年知識層は社会主義思想の進展は不可避であると力説した社会変革に関する理解の実証として、ローレンスの斗争に、アメリカにおける革命的労働運動の範を求め、AFL 指導に対する不信の念をますます高めていった。

1909 年、ペンシルヴァニアのマッキース・ロックスにある圧延鋼車輪会社のストライキに勝利し、ついでローレンスの繊維産業で勝利した IWW は、パターソンの絹産業の労働不安に乗じて組織指導を拡大した。パターソン労働者は 1909 年はじめデトロイト IWW の指導を求めたが、シカゴ派が進出し、後者の動的なゼネスト戦術が部分的勝利を取めた。しかしその直後使用者は警察、

注(45) この宣伝と相まって争議中市中にダイナマイトが発見されたが、これは IWW の仕業とする予定だったと見られるが、真の犯人は争議に関係のない商人であったことが明らかにされた。当時各地に IWW の直接行動を理由とする刑事事件があった。最も有名なのは Macnamara 事件である。

(46) Perlman and Taft, op. cit., p. 272.

(47) AFL は 1905 年 IWW 大会にその支部が参加した United Mine Workers Union, Brewery Workers Union, 等の産業別組合のほか、AFL 内の一部組合の産業別整理と未熟練労働者の組織をはじめた。しかし AFL 幹部はこれを契機に全体としてはますます保守的な労使協調主義的になっていった。

民兵に保護され断固として斗争を続け IWW のゼネスト戦術に抵抗し、22 週間のうちに IWW は敗北を強要された。この間、2,338 名が逮捕され、200 名が裁判に附され、100 名は投獄された。

1913 年アクロンのゴム工場労働者のストライキも警官、民兵、治安官代理等の出動と干渉によって敗れた。以後 IWW は幾多の斗争を指導したが、各所で政府権力によってはげしく弾圧され、孤立化していった。

IWW の凋落 奔流の氾濫するような勢で抬頭した IWW は糾合し統一行動に動員した労働者大衆を固定した組織に継続して維持することができなかつた。この点では、彼等の指導した斗争に立ちあがった労働者が水準以下の労働条件をおしつけられていた外国生れ労働者であったために、アメリカ社会に安定した継続的な大衆団体を維持する能力に欠けていた事実をも無視すべきではない。

この沈滞に直面して、IWW では内部の批判がはじまった。これよりさき西欧の労働運動を経験したフォスターは、IWW の二重組合主義を批判して、現存する AFL を主とする労働組合の急進化を主張した。彼はこの主張を実践することを目的として 1912 年北米サンデカリスト同盟を組織した。フォスター達のこの同盟はフランス労働総同盟に範を求めて、ゼネスト、産業別組合、サボタージュ、反議会主義、反国家主義等の戦闘的斗争方針を支持したが、労働組合運動は統一さるべきであると主張した点他のサンデカリストとちがった。⁽⁴⁸⁾この運動は相当に発展したが、当時の急進的指導者の圧倒的多数は AFL に対立する組合運動の確立にのみ専念していたため、フォスターは所期の目的を放棄して 1914 年同盟の解散を余儀なくされた。⁽⁴⁹⁾

IWW の内紛は組織の中央集権に対する地方組織による分権主義の主張であった。未経験の労働者が悪条件の極限まで圧迫されて斗争する際には中央の指導と規律に従ったが、いったん緊迫した斗争状態がすぎるとき、彼等は中央指導に反逆したのである。その上中央の指導自体が組織の恒常化を希望するよりも直接行動を過度に重視し、しかも終局目的の宣伝を第一の使命としていたのであった。革命的宣伝のみでは未熟練労働者を長期にわたっていつまでも組織にひきつけておくことはできなかった。遠い将来に達成されうるといふ理想は、現実の経済的欠乏と絶えざる使用者の日常的攻撃の前には無力であった。IWW はストライキの決定的時期に威力を発揮したが、そのうちに恒常組織の基礎を固めようとはしなかつた。また彼等の革命的信念は、ストライキに突入すれば妥協せず最後まで要求を変えずに斗い抜くことであった。そのために不必要な敗北を導く危険の多い指導者自身の観念的自己満足に陥りすぎた。その結果労働者大衆の信頼を失うことになり、この間隙に使用者団体の反撃、政府機関の動員、裁判所の秩序維持と関連する直接行動に対する処罰等が、IWW の活動をますます不利な条件においやつたのである。

注(48) Perlman, op. cit., pp. 278-9.

(49) Foster, op. cit., pp. 117-118.

セーボスはその名著「左翼組合主義」⁽⁵⁰⁾の中で IWW の欠陥を詳細に指摘しているが、それを要約すると次の諸点となる。(1)ストライキのときの外には、日常利益の問題ではほとんど指導を欠いていた。(2)ストライキ中であっても当面の利益よりも理論宣伝を重く見た。(3)恒常的活動のための地方組織を確立しなかつた。(4)ストライキには有能な指導者が派遣され指導に当たったが、ストライキがすめば立去って最も必要な組織を守る注意や指導を怠った。(5)ストライキ基金に反対し、また地方に有給役員をおくことにも反対し、末端組織を弱体化させた。(6)ストライキ終結とともにストライキ組織を解消したため、ストライキ後に使用者より獲得した条件を確保し続けることができなかった。(7)また再び危機に当面すれば組織活動は全然再出発する必要を繰り返すことになった。

これとは全く別の立場からフォスターは共産主義者として、また IWW の活動家であったものとして、次のように⁽⁵¹⁾批判している。(1) AFL および社会党と正面から対立し、(2) 労働者階級の政治斗争教育を無視し、(3) ゼネストを濫用し、(4) 宗教問題の取扱方針を誤り(無政府主義的無神論の立場からキリスト教を誹謗した)、(5) 組織を強化することを妨げた無政府主義的分権主義、(6) サボタージュ戦術に偏し破壊主義者を自認することになり、(7) 過度に労働者大衆の自然成長性に頼りすぎ、(8) 保守的な労働者にサンデカリズムの革命思想を押し付けるセクト的態度をとった等である。

前者は恒常的大衆組織の観点からの、後者は革命的労働運動の観点からの批判であるが、ともに IWW の欠陥を余すところなく把握している。

このようにして、IWW は第一次世界大戦時に急進的反戦斗争と固有のストライキを推進するが、すでにみた最盛期にも顕著であった性格を固執して、戦時下に崩壊するのである。

注(50) Saposs, D.J., Left Wing Unionism. pp. 148-149.

(51) Foster, W.Z., op. cit.